

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

オセアニアへの先史人類集団の拡散と適応 (シリーズ  
: 先史モンゴロイドを探る)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 印東, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5768">http://hdl.handle.net/10502/5768</a>

シリーズ：先史モンゴロイドを探る

# オセアニアへの先史人類集団の拡散と適応

印 東 道 子

本稿で扱うオセアニアとは、オーストラリア大陸およびメラネシア、ミクロネシア、ポリネシアの3地域をさす。インドネシアの島々は除くが、イリアンジャヤとなっているニューギニアの西半分は含む(図1)。この広い地域に散在する島々のほとんどが、人類集団によって居住されているか、あるいはかつて居住されていた証拠を残している。

オセアニアの人々は、言語や形質的特徴から大別して二つのグループに分けることができる。ポリネシアやミクロネシア地域に主として居住するオーストロネシア語を話すオーストロネシア人と、それ以外の非オーストロネシア語を話すオーストラロ・メラネシアンである。メラネシアには両者が混在し、オーストラリアのアボリジニーは後者に含まれる。

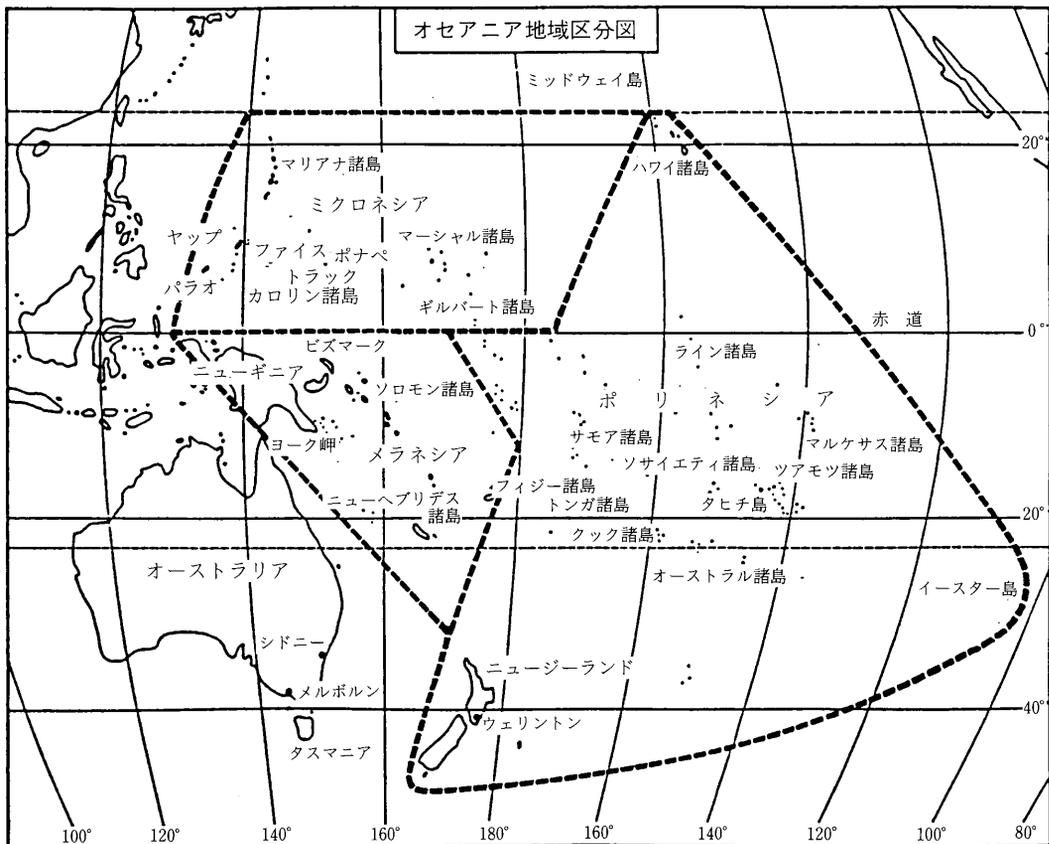


図1 オセアニアの地域区分図

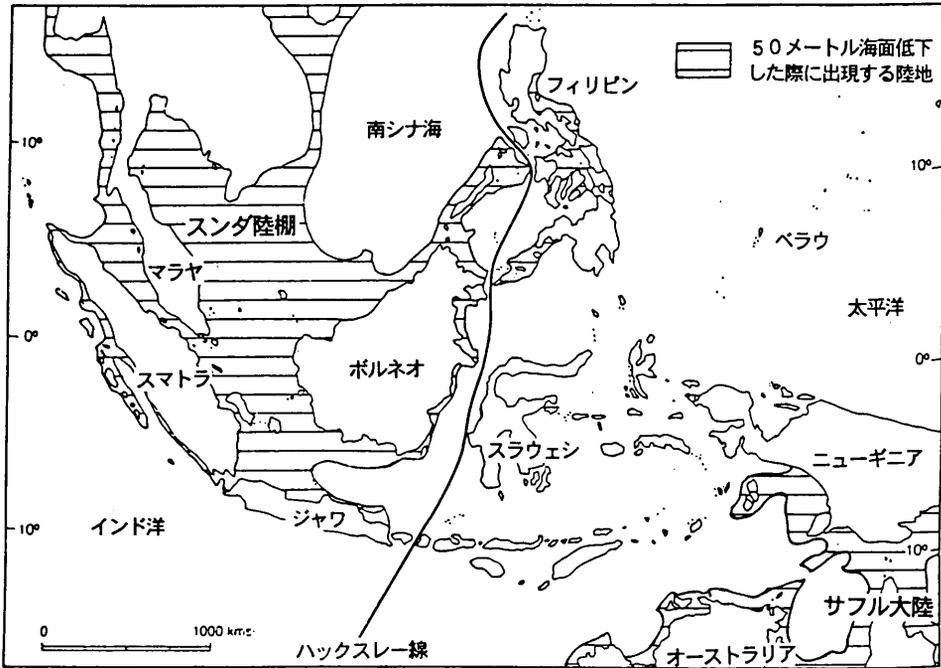


図2 更新世に形成されていたスダラ陸棚とサフル大陸

### 旧石器文化を持った人々の拡散

オセアニアへの最初の拡散は、旧石器文化段階にある *Homo sapiens sapiens* によって、今から約5万年前の更新世になされた。このころは海面が現在よりも約80m低くなっており、オーストラリアとニューギニアは陸続きになってサフル大陸を形成し、インドネシア島嶼部は陸続きとなってスダラ陸棚を形成していた(図2)。両大陸は最も狭い時でも約80から100キロメートル離れていたため、この拡散は海を渡って行われた。どのような渡海手段を用いて海を渡ったのかは明らかではないが、島づたいに渡るようなきわめて単純なものであったと考えられる。広い太平洋を東へ横切って、アメリカ大陸まで行けるような高度な技術ではもちろんなかった。

現在見つかっている最古の遺跡は北部オーストラリアのアーネムランドにあり、約5万2千年前のものである。オーストラリアの多くの遺跡は海岸沿いに分布しているが、内陸遺跡も少しずつ見つかりつつある。遺物は川原石の一端を打ち欠いて刃をつけたコアスクレイパーが主で、剝片石器

なども作られた。

人骨は、かなりの量がオーストラリアの南東部から出土している。これら出土人骨はその形態的特徴から、きゃしゃなタイプと頑丈なタイプの二つに大きく分けられる。前者はインドネシアや南中国の後期更新世人骨に類似しており、マンゴ湖遺跡(2万5千~3万年前)やレイラー遺跡(1万3千年前)などから出土している。後者はコウ沼(1万4千~9千年前)やタルガイ、コッサオク(6,500年前)などから見つかっており、インドネシアのソロ溪谷出土の *Homo erectus* に似ている。人類の頭骨は一般にごつい骨のほうが古く、きゃしゃな方が新しい傾向にあるが、オーストラリアの場合は逆である。これを複数のグループによる移住の結果生じた相違であるとする見方と、移住は1回であるが地域差が出現したとする説とがある。遺伝学の成果からは、オーストラリアに1回以上の拡散移住が行われたかどうか、5万年という大きな時間の幅のためにはっきりわからない。いずれにせよ、これらの人骨はオーストラリアンアボリジニーの形質的特徴をよく示しており、彼らの直接の祖先であったと考えられている。

次に8000年前までオーストラリアと陸続きで

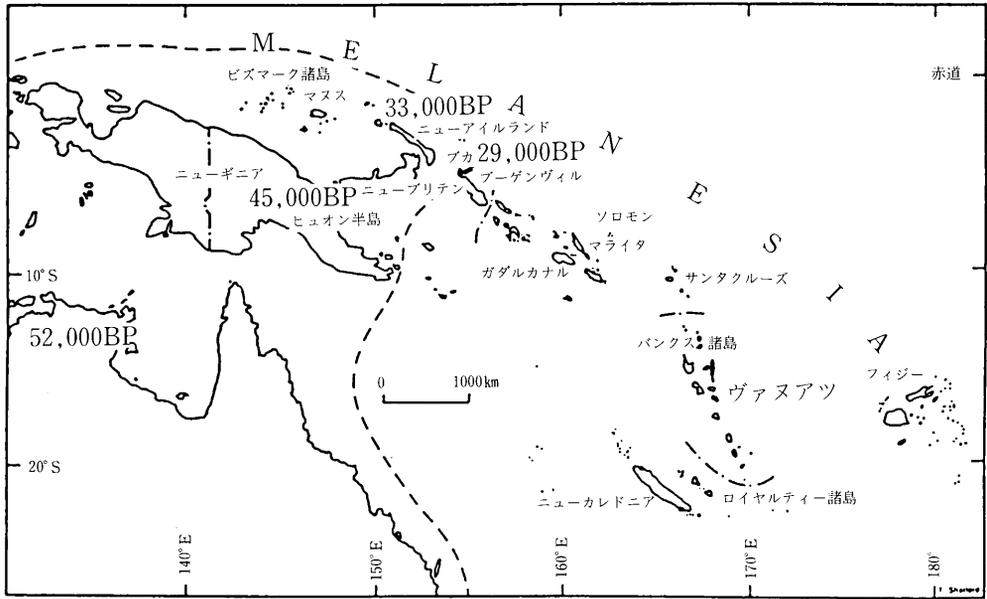


図3 メラネシアの旧石器文化遺跡の分布範囲(点線の西側)と主な年代

あったニューギニアはどうであったかという点、あまり古い遺跡は見つかっていない。これは初期の遺跡が低地に存在し、現在は海底に沈んでいる可能性が高いためである。ようやく最近ニューギニア北東のヒュオン半島で見つかった4万5千年前の遺跡が、現在のところ最古の遺跡である。ここからは東南アジアの旧石器と類似した石核器や、スクレイパー、分銅型石器などが見つかった。他方、ニューギニアからは古い人骨がほとんどいってよいほど見つかっていないため、アボリジニーとニューギニア高地人との形質的關係は、あまりよくわかっていない。

オーストラリアとニューギニアの先史文化で最も異なる点は、ニューギニアでは農耕が行われた点である。ニューギニア高地ワギ谷のクック湿地では、9000年前に灌漑用水路を使った農耕の証拠が見つかっている。またイリアンジャヤの高地では7000年前の沼の開拓のための水路がみつかり、なんらかの農耕が行われていたことが示唆されている。北ソロモンのブカ島出土の2万8千年前の石器の刃先から、コロカシアの針状結晶体を含んだ澱粉粒が検出されたことは、タロイモがメラネシア地域でかなり古くから利用されていたことを示している。また、農耕に付随する家畜である豚も5000～6500年前のニューギニア高地の遺跡か

ら見つかっている。つまり、オセアニアのほとんどの島々へ初めて農耕を持って拡散したのは以下に述べるオーストロネシア集団なのであるが、ニューギニアではそれよりもずっと早い年代に全く別個に農耕が行われていたのである。

更新世代の人類集団はニューギニアからさらに海を渡ってビスマークの主要3島および、北ソロモン諸島にまで拡散していた(図3)。ニューブリテンでは1万1千年前という年代が現在のところ最も古く、その先のニューアイルランドやマヌスからは3万年前後の、より古い年代が得られているため、今後ニューブリテンからも少なくとも3万年以上にさかのぼる遺跡が発見される可能性がある。これらの島々の間には陸続きになることのない海が存在し、マヌスへたどりつくには約100キロメートルの海を渡ったことになる。さらに前述の北ソロモン諸島のブカ島からも2万9千年前という年代の遺跡が見つかり、旧石器時代人の渡海の実事を示している。

更新世遺跡を残した人々は、少ない人数でごく簡単な採集狩猟経済を営んできたと考えられてきた。しかし、調査の進展とともにその豊かな環境資源を広く利用した生活が明らかになってきている。ニューアイルランドの3万年前の貝塚には少量ながら魚骨も含まれており、漁撈活動を非常に

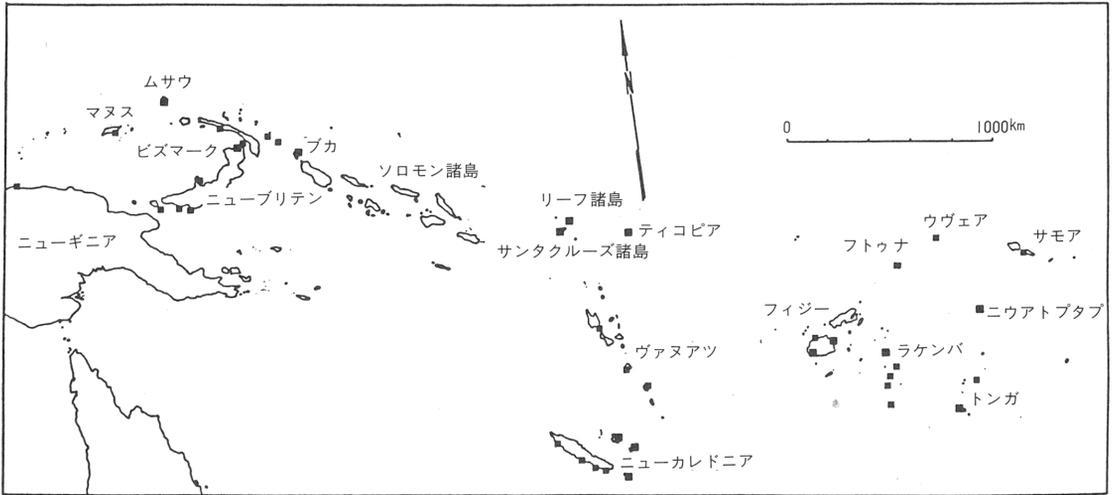


図4 ラピタ遺跡の分布図。大きな島の海岸部や沖合いの小さな島に多い。

早くから行っていたことがわかる。タスマニアでは1万1千年前には壁画を描き、野生動物を導入し、良品の黒曜石や骨製品を使っていた。また、海洋資源も利用した食生活を送っており、貝が大量に消費された。しかし、これらはあくまで身近にある資源の利用という範囲は越えておらず、以下に述べるオーストロネシア集団のように、非常に遠くから必要な資源を運んで来て利用するということはなかった。

### オーストロネシア集団の拡散

上述の、旧石器文化をもったオーストラロ・メラネシアンがメラネシア北部に拡散居住していたところへ、3500年前ごろに新石器文化を持った集団が拡散してきた。これがオーストロネシア語を話すラピタ人である。その携えてきた文化複合はそれ以前のものとは明らかに異なっており、農耕を中心としていた。まず土器を持っていたことが旧石器文化の人々との大きな違いであり、更に家畜(犬、豚、鶏)や栽培植物(ココヤシ、タロイモ、ヤマイモ、バナナ、パンノキなど)を持ち、内湾性漁撈活動を活発に行い、磨製石斧や貝製釣り針、貝製装身具などを豊富に作って使用していた。

この文化複合を示す遺跡がメラネシア島嶼部の海岸部や沖合いの小さな島々で主として見ついている(図4)。すべての文化要素が揃う遺跡はあまりないが、その特徴ある土器が分布も広く、量

も豊富なことから重要な遺跡認識の要素となっている。この土器はラピタ土器とよばれ、細かい砂をテンパー(混和材)として混ぜた粘土でつくられ、非常に発達した幾何学文様や人面文様の装飾が土器の内外面に施されている(写真1)。このラピタ土器特有の文様はどこで発達したかはわかっていない。現在はビズマーク諸島でその文様が発達したのであろうと考えられているが、最近よく似た文様モチーフがマイクロネシアのマリアナ諸島出土の3500年前の土器にも見つかったことは、メラネシアへ拡散する以前に、この特徴ある装飾パ

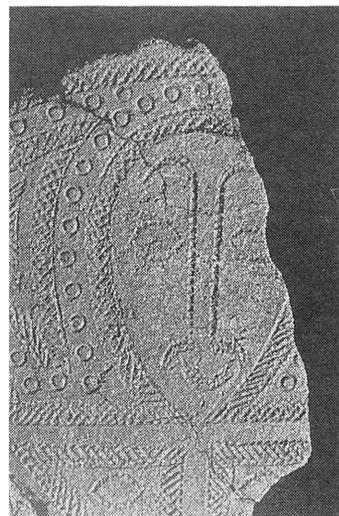


写真1 人面模様のついたラピタ土器片 (Kirch 1988)

ターンがある程度は発達していたと考えるほうが自然であろう。

ラピタ土器を出土する最も古い遺跡は、現在のところビズマーク諸島のムサウから見つかったもので、3600年前の年代が得られている。ここから南方および東方へ拡散したスピードは非常に速く、ビズマークから北東ソロモン、ヴァヌアツ、ニューカレドニア、フィジー、トンガ、サモアへと実に4500キロメートルもの距離を600年ほど東進してしまっただけであった。このスピードの速さを解釈する上で、ラピタ集団が卓越した航海民であったことに加えて、ラピタ遺跡の立地パターンの特徴が示唆的である。初期ラピタ遺跡の分布が旧石器時代遺跡のそれとあまり重ならないことは、両集団が居住域を異にし、互いの接触が最小限であったことを示している。

ラピタ集団は先住集団を避けるように海辺をかすめて通過したため、速い移動スピードを保ったものと考えられる。これによってラピタ人を祖とするポリネシア人と、オーストラロ・メラネシアンとの間に存在する、大きな形質的差異がよく説明される。つまりラピタ集団とオーストラロ・メラネシアンとの混血が行われる前に、ラピタ集団は先住集団のいなかったフィジー、トンガ、サモアへと移動してしまっただけである。他方、ラピタ集団は有用資源を入手するため、通過した地域をも含めた広い交易ネットワークをもっていた。ビズマーク諸島のニューブリテン島、タラセア産の良質の黒曜石が、西はサバから東は東南ソロモン、ニューカレドニアの南端にいたる間の島々の遺跡から点々と見つかっている。この黒曜石を入手するにあたって、ラピタ土器が交易品の一つとして重要な役割を果たした可能性も考えられている。というのは、ラピタ土器を特徴づけている文様が特に入念に施された土器には、実用的な煮炊きには適さないものが多くあるからである。

ラピタ集団は西ポリネシアのトンガ、サモアに到達したあと拡散スピードをゆるめ、約1000年間ここにとどまる。この間に言語を含むポリネシア文化の祖形が形成されたのである。東ポリネシアへの拡散はハワイやイースター島へ紀元後400年、ニュージーランドへ同800年ごろ行われたが、それ以前に移住された中央ポリネシアにおける拡

散年代は、まだ定説化していない。最も古い年代はマルケサスから紀元前150年が得られているが、ソサエティ諸島の古い遺跡は海底に沈んでいる可能性がある。そのため、マルケサスのみを中央および東ポリネシアへの拡散のセンターとはみないで、クック、ソサエティ、マルケサスなどをグループ化した地域へ、最初に拡散が行われたと考える意見が強くなってきている。

中央ポリネシアへ拡散した人々は、基本的にはラピタ文化複合を携えて行ったが、土器はそれから欠落する。マルケサスからは少量の土器が見つかっているが、トンガとフィジー産の土器片およびマルケサスで作ったかもしれないという土器片が見つかっている程度で、ほとんど土器を使っていたという証拠とはなっていない。またクック諸島からも土器片が見つかっているが、フィジー産のものであって自島で作ったものではない。このような変化は土器のみではなく、他の文化要素にも及んだ。中央および周縁のポリネシアの島々へと拡散した後は、長距離航海の技術も徐々にすたれ、それぞれに移住した島の自然環境に適応した資源利用が行われた。家畜は犬、豚、鶏のすべてが持ち込まれて歴史時代にまで至った島がある一方で、そのうちのどれかが欠けた島もあった。海洋および陸上の資源が豊富な島では人口が増加し、それにともなって階級社会も発達した。

### メラネシアにおける混血

前述のようにラピタ集団は、ほとんど先住集団との接触をせずにポリネシアへと東進したのであるが、他方で、その足跡を印したメラネシアの島々に定着したモンゴロイドの小集団もあった。先住民との混血を行ったこれらの人々は、ラピタ集団の移動したすぐあとから同じように南下、東進し、ヴァヌアツからニューカレドニアやフィジーへと二次拡散を行った。この人々は、ラピタ土器とは異なったタイプの土器を持ち、形質的には先住旧石器集団に近い。しかし、この混血の様子や非ラピタ土器の技術の起源などはあまりよくわかっていない。特に最近ニューギニア北部で、ラピタ集団が拡散して来る前から土器が作られていた可能性を示す古い土器が発見され、メラネシアの非ラ

ピタ土器の起源について考える際に重要な資料となることが予想される。

### ミクロネシアへの拡散

ミクロネシア地域が上記の二つの拡散集団の動きとどのように関わっていたのかは、あまりよくわかっていない部分が多い。しかし、旧石器文化の人々がミクロネシアへ拡散した可能性はほとんどなく、ミクロネシアはオーストロネシア集団によって初めて居住されたと考えられる。

最初に拡散居住が行われたのはマリアナ諸島で、ラピタ集団がメラネシア地域へ拡散した3600年前とほぼ同時期に、土器を持った人々が拡散してきた。土器の文様モチーフがラピタ土器のそれと非常によく似ているため、両者の祖先集団が同一であった可能性がながらく指摘されてきている。しかしその祖先集団がどのようなもので、どこから拡散を始めたかに関しては、まだ十分な資料が得られていない。フィリピンとマリアナとの間には、先史時代後期に何らかの文化的接触があったことが出土遺物から指摘されてきている。これをもって3500年前ごろのマリアナへの拡散ルートも同じであったとするのは無理があるが、今後の発掘調査の増加次第ではさらに説得力のある資料が得られる可能性がある。特に、最近フィリピンのルソン島から発掘された装飾土器の文様パターンが、マリアナの古い装飾パターンと類似していることが注目される。調査の進展によっては、あるいはラピタ土器との関係をも示唆する資料になり得るかもしれない。

マリアナ以外の島々へはいくつかのルートを通じて拡散が行われた。年代的に最も古いのがミクロネシア東端のマーシャル諸島で、今から3000年以上さかのぼる非常に古い年代も得られている。言語の研究から、この拡散の担い手はメラネシアから北上して来たと考えられている。すべてが珊瑚島からなるマーシャルでは土器は作られなかった。

今から2000年前には、ミクロネシアの高い島々のすべてに人間が拡散居住していた。西ミクロネシアのヤップやベラウ(パラオ)、中央ミクロネシアのチューク(トラック)、ポーンベイ(ポナペ)、

コシャエ(クサイ)がそれで、いずれの島でも土器を作っていた。ほぼ同時期に拡散したこれらの土器文化の技術的要素は、ベラウを除いてかなり類似していた。そのため、ヤップから東へと拡散した流れがあった可能性が考えられるが、他方、メラネシアの無文化したラピタ土器が、中央ミクロネシアへと北上してきた可能性も示唆されている。中央ミクロネシアの土器作りは短期間で終わられてしまい、最後まで作ったポーンベイでも今から800年前には作られなくなった。

このほか、中央ミクロネシアから西ミクロネシアにかけて点在する珊瑚環礁の低い島々へは、チュークを経由してメラネシアからの強い文化的影響があったことが、言語の親縁性からわかっている。また、中央カロリン諸島西端に位置するフェイス島に紀元後1000年以降、複数回にわたってソロモンの釣針がもたらされていたことは、両地域の接触が一時的なものでなかったことを示している。

ここで一つ指摘しておきたいことは、「ミクロネシア人」という言葉の不適当性である。そもそもオセアニアの3地域の区分が恣意的なものであり、その地域名をとって大きく民族グループ扱いするのが妥当性を欠いているのである。たまたまポリネシア地域の人々は、形質的にも文化的にも均一性が高く、ポリネシア人という呼称をつかっても差しつかえが少ない。しかしミクロネシア地域に住む人々は、現在わかっている範囲においても、大きく二つの異なる集団を含んでおり、言語的にも文化的にも「ミクロネシア人」として単一集団扱いすることは避けるべきであろう。

### 環境への適応

オセアニアに拡散した人々が、それぞれの住み着いた環境に適応していった過程は多様であった。近年のオセアニアの考古学調査は、特に島という限られた自然環境と、そこに居住した人間との関係を明らかにすることに主眼を置いたものが多く、古環境、地質、植物生態、動物や魚など、異なった分野の研究者との合同調査が盛んに行われ、興味深いデータが次々に得られつつある。

ポリネシアの島々で最近行われた研究から共通

して観察されたことがいくつかあげられる。移住初期には人口も小さく、環境へ及ぼした影響は少なかったが、移住後数百年には絶滅に追い込んだ鳥の数が増加し、消費した貝や魚のサイズが減少するなど、環境へ与えたインパクトが目立つようになる。また花粉分析からは、人間の移住後の炭の増加や、樹木類の減少とシダ類の増加が観察されている。これは明らかに人間の土地利用と関係していて、有用植物のココヤシやパンダナスの花粉が急激に増加したことも広く見られる現象となっている。

拡散移住した島では自然環境に応じて様々な技術適応が行われた。釣り針の形態変化や土器作りの変化などはそのよい例である。例えば、マルケサスの初期移住者たちは多様性に富んだ釣り針を作り、特に鰹や鮪などをトローリング用釣り針で多く捕っていた。しかし時代が経るにつれ、トローリング用の釣り針を作らなくなり、湾岸性内湾用の単式釣り針を多用するようになった。これは同島が珊瑚礁に囲まれておらず、険しい火山島であることと密接に関連している。釣り針の形を改良することによってスズキ科の魚を岸から捕るようになったのである。

土器は前述のように、オセアニアに拡散してきた初期オーストロネシア集団の携えていた文化複合に含まれていた。約2000年前頃には、マーシャルを除くマイクロネシア全域から東ポリネシアにまで分布していた。しかし、その後土器作りが途絶えた島が増え、ポリネシアおよび中央マイクロネシアでは土器を作っていたことさえ忘れられてしまった。この土器分布域の収斂という現象の背景には、移住先の自然環境という要因が大きく働いていたことが考えられる。具体的には土器作りに必要不可欠の粘土の有無（火山島であるか珊瑚島であるか）、およびその質（安山岩線の西であるか東であるか）が土器作りの継続、非継続に直接影響したであろうし、また、石蒸焼き料理法という代替調理法や木器の発展も、土器使用の中止に寄与したことが考えられる。

オセアニアへ拡散してきた二つの人類集団は、それぞれの文化段階に応じた方法で海を渡り、生活の場となった個々の島の自然環境に適した技術を発展させてきた。今後の課題として、この二つ

の集団が互いにどのような接触を持ち、それが互いの文化にどのような影響を与えたのかを明らかにしなくてはならないであろう。それなくしては、メラネシア地域の複雑な文化要素を理解するのは困難である。

#### 参考文献

- 1) Allen, J. and Gosden, C. (eds.): *Report of the Lapita Homeland Project*. Occasional Papers in Prehistory No. 20. The Australian National University, Canberra (1991).
- 2) Dodson, J. (ed.): *The naive lands; prehistory and environmental change in Australia and the Southwest Pacific*. Longman Cheshire, Melbourne (1992).
- 3) Galipaud, J.C. (ed.): *Poterie Lapita et peuplement*. ORSTOM, Nouméa (1992).
- 4) 印東道子: 「モンゴロイドの道: オセアニアへ進出」科学朝日 623: 116-120 (1992).
- 5) Kirch, P.V. and Hunt, T.L. (eds.): *Archaeology of the Lapita cultural complex—a critical review*. Burke Museum Research Report No. 5. Washington (1988).
- 6) Loy, T.H., Spriggs, M. and Wickler, S.: Direct evidence for human use of plants 28,000 years ago: starch residues on stone artefacts from the northern Solomon Islands. *Antiquity*, 66: 898-912 (1992).
- 7) 大塚柳太郎, 片山一道, 印東道子 (編): 「島嶼に生きる・オセアニア1」, 東京大学出版会 (1993).
- 8) White, J.P. and O'Connell, J.F.: *A prehistory of Australia, New Guinea and Sahul*. Academic Press, Sydney (1982).

印 東 道 子 (いんとう・みちこ, 1953年生)  
北海道東海大学国際文化学部 助教授。  
ニュージーランド国立オタゴ大学大学院人類学  
科博士課程修了。Ph. D.  
研究課題: オセアニア先史学/先史土器技術の  
復元。

文部省科研費・重点領域研究  
課題番号: 04208209

学振新書 5・6 <学術月報の巻頭言等収録>  
沢田敏男 編 (1) 定価 680 円  
学術振興のすすめ (2) 定価 760 円